

大杉榮略傳

明治十八年（出生） 彼の父は「大杉東」と稱した。父が陸軍少尉に昇進して讃岐丸龜に轉任された時、母「とよ」との間に長男として生れ、「榮」と名附られた。即ち一月十七日である。

祖父の地は愛知縣海東郡越治村大字宇治（後ち「神守村」と稱す）で、代代庄屋を務めた、かなり舊家である。彼が生れると間もなく、父は近衛聯隊に再歸したので、彼も抱かれて東京へ出て來た。

明治廿二年（五歳） 父は越後の新發田へ再び轉任された。そして彼は、其處で十五歳まで育てられた。

體は至つて大きく、腕白、亂暴、手の附けられない程だったが、小學校では秀才だった。父は多く留守勝ちなので、少年時代は主として母の薫陶を受けた。母は女に稀な豪膽勝氣な人だったが、彼れも父よりはそうした母の血を多く受け繼いでゐた。

父、擊劍、柔道などを坂本謹吾といふ人に仕込まれ、十三四の頃、殊に柔道は同年輩の者三名位を相手にしても負けなかつた。

明治三十二年（十五歳） 軍人の子として育てられた彼は、十五歳の時、名古屋幼年學校に入れられた。が、二年半にして退校處分

に附せられた。

退校されたのは、男色のことが動機ではあつたが、しかし其の眞因は、放恣亂暴にして規律に服さず、上官に對つて絶えず反抗したことにある。

明治三十五年（十八歳） 上京して順天中學の五年級へ入學した。これは、幼年學校で習ひつゝあつた佛語を完成して軍事上に雄飛せんと志し、外國語學校へ登るべき下準備のためであつた。

「俺は幼年學校を退校されたつて、佛語を完成させて軍事外交上に活躍し、同僚の奴等をアツと言はせてやる——」といふのが、當時の彼の意氣だつたのである。

この順天中學在學中に、彼の母は死んだ。因に、彼には、ハル、キク、仲、マツメ、男、進、アキ、アヤメ、などの弟妹があつた。

で、母の死に對する悲しみが幾分残つてゐたのと、性慾の熾ましい淋しさから、彼は其の後、ふと本郷教會堂へ通ふやうになつた。そして、海老名禪正の説教に聞き惚れたり、洗禮を受けたりもした。しかし此の同じ彼れが、一方に於いては又、矢野龍溪の「新社會」だの、丘淺治郎の「進化論講話」だのを讀み耽つて居たのである。

當時、足尾の鐵毒問題として喧しかつた所謂「谷中村事件」のため、同年十二月、都下の學生一千名が大旗を立てて示威運動をした事があつた。そして、この示威運動を見た彼れは、直接に深く社會問題

を考へるやうになつた。

明治三十六年（十九歳） 中學校を卒業して外國語學校佛語科へ入學した。傍ら正則英語學校にも通つた。

同年冬、「萬朝報」に非戰論の騒ぎが起つて、幸徳秋水、堺利彦、石川三四郎等が退社し、直ちに平民社を組織して十一月から純社會主義の週刊「平民新聞」を發刊した。既に幸徳の「社會主義神髓」などを愛讀してゐた彼れは、此の運動に大いに興味を持つて平民社を訪れた。

明治三十七年（二十歳） 平民社の「研究会」へ出席してゐるうちに、彼はすっかり宗教を捨てた。そして、學校の歸りには平民社を助ひ、雜務を手傳ふ傍ら幸徳を助けて、「海外事情欄」に外國雜誌から運動の形勢を譯載するに至つた。

明治三十八年（二十一歳） 週刊「平民新聞」は一月に廢刊となり「直言」が二月から發刊された。が、それも亦九月を以つて廢刊し十月には平民社も解散して了つた。そして新たに、基督教社會主義派の「新紀元」と、非宗教派の「光」との二新聞が生れる情勢となつた。勿論彼は、「光」を手傳つた。

明治三十九年（二十二歳） 四月、外國語學校を卒業した。そして語學教師の就職を頼みに行く途中で「電車賃値上反對運動」の渦中に飛び込んで收監され、兇徒案集罪として、二年六ヶ月の求刑を受けた。

しかし、六月、保釋で一旦出獄した。

八月、堀柴山の妹で且つ堺利彦前夫人の妹である堀保子と結婚し、市ヶ谷田町に居を構へた。

十一月、「光」第二十一號に、佛國無政府黨の機關紙「ラナルシイ」から「新兵諸君に與ふ」と題する非軍備運動の檄文を譯載し、新聞紙條令違犯で起訴された。

この頃、彼れは、黒板勝美、千布利雄等と「日本エスハラント協會」を創立した。

明治四十年（二十三歳） 一月、幸徳、堺等によつて日刊「平民新聞」の發行を見た。彼は其の二月某日の紙上に「歐洲社會黨運動の大勢」と題する論文を書き、公然、無政府主義者としての名乗りを擧げた。

四月、「新兵諸君に與ふ」の裁判は、朝憲案亂の罪で禁錮五ヶ月と決定し、巢鴨監獄に投ぜられた。そしてまた此の入獄中、日刊「平民新聞」に譯載した、クロボトキンの「青年に訴ふ」の最後の一章で起訴され、秩序案亂の罪で更に禁錮三ヶ月を加へられた。

日刊「平民新聞」は四月十四日を以つて發行を禁止され、六月から大阪で發刊された「大阪平民新聞」が「日本平民新聞」と改題した十一月に、彼は巢鴨監獄から出て來た。そして彼は、當時の新聞にクロボトキンの「パンの略取」を譯載しつゝあつた幸徳の後とか受けて

その課職を續けて行つた。

明治四十一年(廿四歳) 一月に「余曠講演會」の謂ゆる「屋上演說事件」を引起し、堺、山川等と共に治安警察法違犯として禁錮一ヶ月半に處せられた。そして二月に入獄した。

六月、神田錦輝館に開かれた山口義三の出獄歡迎會が解散を命じられた時、血に燃ゆる男女十四名が「無政府共産」と大書した赤旗を街頭に懸して警官隊に突撃した。世に云ふ「赤旗事件」である。彼れも此の事件の一人として捕えられた。

此の事件の取調中、檢察は彼が兇徒聚集罪の保釋中に三度び入獄して居たことを發見し、齒を鳴らして口惜しがつた。八月、裁判の結果、彼れは官吏抗拒及び治安警察法違犯として懲役二年六ヶ月に處せられ、堺、山川、荒畑等十名と共に千葉監獄へ送られた。

「重きによつて處斷する」といふ、當時の有難い舊刑法のお蔭で、電車事件の二ヶ年は赤旗事件の二ヶ年中に通算されて了つた。が、既に務め上げた屋上事件の一ヶ月半までが、それに通算されたのは滑稽である。彼は屋上事件は既に務め上げた事を言はうとしたが、生れつきのひどいドモリの爲に言ひ憚んでゐる間に、さつさと裁判が終つて了つたのである。が、これは後ちに差引かれて出獄した。

明治四十二年(廿五歳) 千葉監獄服役中である。彼は此の在獄中にウンと勉強した。各國の無政府黨の機關紙の合本や、無政府主義の

書物などさへ、いい加減な表題を付けて差入れられたのである。彼の根本思想が、この在獄中に、よほど廣く、深く、鋭くされた事を彼れ自ら後に書き記してゐる。

明治四十三年(二十六歳) 二月、彼の入獄中に當時陸軍豫備少佐であつた父が死んだ。

十一月千葉に監獄を出て(屋上事件の一ヶ月半を引く)見ると、同志の多くは大逆事件で捕えられてゐた。で、一足先きに出獄した堺利彦の實文社に關係し、僅かに残つた同志とともに共稼ぎすることとなつた。

明治四十四年(二十七歳) 一月二十四日、大逆事件の判決の結果十二名は死刑に、他の十二名は無期懲役其他に處せられ、多くの同志四散して影を没し、日本社會主義運動史中の最も慘憺荒涼たる時代が來た。

彼は又、警保局長古賀廉造から法華經の佛譯を更に日本譯す仕事に頼まれ、それに依つて多少生活費を得て居つた。

大正元年(二十八歳) 彼と荒畑三とが中心となり、「近代思想」と名づくる一種の文藝雜誌を十月創刊した。この雜誌は、哲學社會學等の抽象論、又は小説などに隠れて知識階級の青年を相手に宣傳し或は學者、評論家の胡亂化し論への思想戦を開いたものである。彼は主として社會學、哲學方面を受持つた。そして、思想的相違の漸く

著しくなりつたあつた堺利彦等は、外部から之れを援けた。

大正二年(二十九歳) 「近代思想」は怒ちにして存在を認められ、早くも文壇、思想界の一權威と目されて來た。そして、二月以來は、毎月「近代思想社集會」を催して多くの文壇新思想家が來合するやうになつた。

又、一方では、七月から「センテイカリズム研究會」を毎月一回開いて、荒畑と共に青年の間に具體的な宣傳講演を試みた。が、集る者の大ていは知識階級の青年で、しかも極めて少數に過ぎなかつた。

大正三年(三十歳) 「近代思想」は益々發展して、其の論調、色彩は次第に鋭くなつて來た。「センテイカリズム研究會」の人達の眼も輝いて來た。

そこで荒畑も彼も、文藝青年相手の「近代思想」では辛棒がし切れなくなつて來た。冒險の快感を味はんとする賭博本能が、體中に満ちて來た。二人は同誌の五月號に、眞の友人たる労働者を相手に端的な具體論に進むとの豫告を掲げ、翌六月號に新雜誌の計畫を發表した。

新しく「近代思想」は九月(二卷十二號)を以つて廢刊し、十月から労働者相手の月刊「平民新聞」を發刊した。「労働者の解放は労働者自らの仕事でなければならぬ」——これが「平民新聞」のモットオであつた。が、それは、一、二、三號と續いて禁止された。

大正四年(三十一歳) 「平民新聞」第四號は、全面を轉載記事で埋めて漸く禁止を免れたが、しかし、五、六號は又もや續いて配布禁止を命ぜられた。かくて悲しい哉、遂に廢刊の止むなきに至つた。

十月、再び、「近代思想」を復活させた。その内容は、「平民新聞」と前の「近代思想」とを搦き混ぜたやうなものだつた。

「センテイカリズム研究會」の方は漸次盛んとなり、この年からは「平民講演」と改められた。

大正五年(三十二歳) 四年末から近代思想社に内紛が起つた爲め雜誌は一月號を以つて廢刊となつた。しかし「平民講演」の集りは、小石川水道端の平民俱樂部、神樂坂の藝術俱樂部、小石川駕籠町の宮島實夫宅と轉々しながら、猶ほ四五月頃まで繼續された。

「近代思想」の廢刊後、彼は神近市子、伊藤野枝との戀愛に陥ちた。そして十一月、相州葉山の「日蔭の茶屋」で神近市子に刺されて危く死なんとした。この事件以來、彼と堀保子との間は斷然たれ、親しかつた同志とも一時は始んど離れてしまつた。

大正六年(三十三歳) 「葉山事件」の後、彼は伊藤野枝と共に、下宿屋を渡り歩いてゐた。漸く秋になつて巢鴨宮仲に家を借り、そこで長女「魔子」を擧げた。

十二月、彼は此の冬底の中から、野枝と共に月刊「文明批評」を發刊した。

大正七年(三十四歳) 一月、彼は東京市外龜戸に轉居して、和田久太郎、久板卯之助の二人と同様する事になつた。労働者街に住み、労働者を友として活動したいと云ふ希望は、彼れが千葉監獄でG・Tの研究に耽つた時から固く心に期してゐた。愈々その實行に移つたのである。「文明批評」は三號で廢刊した。そして、和田、久板の兩名を援けて、純労働者向きの、且つ労働者達ち自らの爲めの月刊「労働新聞」を創めた。

和田、久板の兩人は、當時、上野櫻木町に開かれてゐた「労働問題座談會」の出席者であつた。此の「座談會」は、一年以上の歴史を有つ労働者ばかりの集りで、その大半はサンチカリズムに傾いてゐた。彼れも亦、一月以來この集會へ出席するやうになりサンチカリズムや無政府主義に就いて熱心に詳述した。かくて「労働新聞」は、多く此の人達ちによつて授けられ、諸所に配布せられた。

しかし、此の新聞もまた猛烈な政府の迫害と禁止を受け、七月に田端へ轉居して、漸く四號を出したきりで廢刊して了つた。又、「労働問題座談會」は其後大いに盛んとなつて、「北風會」(この集會の創立者たる渡邊政太郎が死んだので、その號の北風を取つたのだ)と改名した。

大正八年(三十五歳) ロシア革命、經濟界の好況、米騒動、國際労働會議などが遠因近因となつて、春頃から労働組合運動が俄かに盛

んとなつて來た。そして労働プロオカア共や、御用學者共の演說會が所々に開かれた。

その當時、毎土曜日に集會して労働運動の闘士養成所の觀を呈してゐた。小石川指ヶ谷町の「北風會」の人達ちは、それ等のまやかし者共の演說會を片つ端しから打つ壞しに行つた。此の運動は實に猛烈な眼ざましいものだつた。彼は「北風會」の集會に、或はかうした實行運動の先頭に常に活躍したので、新聞紙は此の「北風會」の人達ちを「大杉一派」などと書き立てた位だ。

彼は田端の家を火事で焼け出され、西ヶ原、中山、と轉々しつゝあつたが、十月に本郷曙町に落着いた。そして、近藤憲二、和田久太郎、中村運一、久板卯之助、伊藤野枝、等と共に、月刊「労働運動」を發刊した。労働運動の報導、自主自治的労働運動の促進が、其の目的であつた。

斯うした激しい活躍振りを政府に白眼れた彼は、十二月に至つて、傷害罪(すつと以前の尾行巡查殴打)で懲役三ヶ月に處せられ、豊多摩監獄へ送られた。そして、其の留守中に次女の「サチ」が生れた。

大正九年(三十六歳) 三月出獄、體の精養を兼ねて鎌倉へ轉居した。六月、「労働運動」をも一時廢刊した。

八月、あらゆる色合ひの同志を叫合せんとする「日本社會主義同盟」組織の計畫があつて、彼も其の發起人の一人に加はつた。又、十

月には、極東社會主義者(廣く意味での)の國際的聯盟を組織するたために、密かに上海に渡り、一ヶ月ばかり滞在して歸京した。

大正十年(三十七歳) 一月、以前の「労働運動」の同人に、伊井敬(近藤榮藏)、高津正道等のホルシエキの人達ちも加はつて、週刊(労働運動)を創めた。

二月、チブスで入院。一時は危篤だつたが、三月下旬に全癒退院した。命は取り止めたが、折角の週刊「労働運動」は、ホルシエキ一派の陰險な裏切りと、財政困難とのために、六月に廢刊して了つた。

これより先き、三女「エマ」が、彼れの入院中に鎌倉で生れた。

大正十一年(三十八歳) 一月、和田久太郎、近藤憲二、伊藤野枝などと共に、再び「労働運動」を月刊として復活させた。そして労働組合の間に自由聯合主義を鼓吹し、無政府主義の立場からホルシエキに對して猛烈な論陣を敷いた。又、以前から開かれてつあつた各所の労働組合内に於ける秘密集會に出席した。旺盛な彼れの精力は、よく書き、よく奔走し、よく談じて、些かも倦まなかつた。

その四月に、四女「ルイズ」が生れた。

十月、「全國労働組合聯合」組織の協議會が、大阪天王寺公會堂に開かれた。が、日本労働連同盟側の合同主義と、労働同盟會側の自由聯合主義と相容れず、遂にこの協議會は決裂して了つた。彼も此の

前後、熱心に自由聯合主義のめに戦つた。

十二月、フランス無政府黨からの通報に接して、彼はベルリンに開かれる第の國際無政府主義大會に参加するため、密かに日本を脱出してフランスに行つた。

大正十二年(三十九歳) ベルリンに開かるべき無政府主義大會は各國政府の迫害に遇つて、無期延期となつた。で、彼は、メーデーの郊外に開催された労働者の集會に演說し、フランス官憲に捕へられて禁錮三週間に處せられた。そして、有名なラ・サントの牢獄に投ぜられた。出獄と同時にフランスを追放され、七月十一日、無事神戸に着いた。

八月、府下柏木に住居を移し、長男「ネストル」を擧げた。即ち、彼れが最近に深く興味を有つて研究しつあつた、「無政府主義將軍」ネストル・マフノから思ひついた命名である。

九月一日、未曾有の大震災が起つた。そして、その混亂最中の十六日に、伊藤野枝、橋宗一(彼の甥)と共に、麹町憲兵分隊に於て、憲兵大尉甘粕正彦等のために絞殺されて了つた。

伊藤野枝略傳

明治二十八年一月、福岡縣糸島郡今宿村に生れた。

明治四十二年、十五歳にして上京、上野女學校の四學年に編入され

た。

翌年(十六歳)卒業。直ちに辻潤に嫁いだ。

大正三年から四年に亘り、當時に於ける女子解放運動の中心であつた平塚らいてふ等の青鞜社に入り、大いに社會に認められるようになった。

彼女が唯一の譯書たるエマ・ゴールドマンの「婦人解放の悲劇」はこの當時に譯されたものである。

辻潤との間には一、隆次の二男を生んだ。

後ち大杉榮との戀愛に陥り、大正六年の秋、同棲して長女マコを生んだ。

それより大杉榮を助けて無政府主義運動に従事し、勇敢によく戦ひつた。そして竟に昨十二年九月、大杉君等と共に敵の毒手に虐殺されたのである。

彼女の著書は、前に述べた「婦人解放の悲劇」の他に、大杉君との共著「二人の革命家」、「乞食の名譽」、「クロボトキン研究」、「悪戯」及びやはり大杉君との共譯「科學の不思議」などがある。皆な共に彼女の思想の反映である。(大杉榮略傳「及び」著作年表、参照)

橘宗一略傳

橘宗一君は大杉榮君の未妹あやめ君の一人兄でした。一九一七年

大杉榮著作年表

- ◆「萬物の同根一族」明治四十年出版。堺利彦の編輯した「平民科民叢書」の第六篇だ。ノット・ムツア著「Universal Kinship」の一篇「肉體篇」を譯したもので、進化論の通俗講義である。彼が二十一二歳のとき集鳴の獄中で譯したものだ。(絶版)
- ◆「生の闘争」大正三年十月出版。「近代思想」及び其他の誌上で發表したものを蒐めた最初の論文集である。(絶版)
- ◆「物質非滅論」大正三年十月出版。「群衆心理學」を著して有名なギトスマツ・レ・キンの「La Naissance et l'Evolution de la Matiere」及び「L'Evolution de la Matiere, Livre I, Les Idées nouvelles sur la Matiere」の翻譯である。(絶版)
- ◆「社會的個人主義」大正四年十一月出版。「生の闘争」以後一ヶ月間の諸論文を蒐めたものだ。(絶版)
- ◆「労働運動の哲學」大正五年三月出版。「生活と藝術叢書」の第四編で、労働運動、殊にセンテイカリズムに関する論文を蒐めたものだ。(發賣禁止)
- ◆「種の起原」大正五年三月出版。ダーウィン著「The Origin of Species」の翻譯である。

四月、北米合衆國オレゴン州ボオトラッド市に生れ、父母のいつくしみ限りなく、四歳のときから、ボオトラッド市幼稚園に通つてゐた。

所が、一九二三年六月、母あやめ君と共に日本に來たり、横濱にゐた大杉君の弟勇君の所にゐて九月一日の震災に會ひ、漸く大杉君夫妻に迎へられて柏木へ來る途中、不幸、大杉君等の虐殺の巻き添へとなつたのであります。年七歳、まことに哀悼に堪へない次第であります。

▼ 寫 眞 ▲

同志諸君のうちに、大杉君等の寫眞を望まれる方が多くなないので、次の通りのもを作りました。御希望の方は御申越下さい。

- ▼コロタイプ寫眞。横四寸、縦六寸の大きさ
- ▼三枚一組、定價三十錢(送料共)

労働運動社

◆「男女關係の進化」大正六年二月出版。ルトウルノ著「L'Evolution du Mariage et de la Famille」(婚姻及び家族の進化)の翻譯である。

◆「民衆藝術論」大正六年六月出版。ロメン・ロラン著「Le Theatre du Peuple」の翻譯である。

◆「相互扶助論」大正六年十月出版。クロボトキン著「Mutual Aid」の翻譯である。

◆「獄中記」大正八年八月出版。彼れ自身の牢獄生活を追憶のままに書いたもので、また彼れの自叙傳の一節とも云ふべきものだ。

◆「革命家の思出」大正九年二月出版。クロボトキンの自叙傳

「Memirs of a Revolutionist」の翻譯だ。

◆「乞食の名譽」大正九年五月出版。伊藤野枝との共著。短篇小説集である。彼の「死灰の中より」が野枝さんの短篇「轉機」、「惡ひ」、

「乞食の名譽」と共に收められてゐる。何れも二人が各々自らの事に就いて書いたものだ。

◆「クロボトキン」研究 大正九年十一月出版。クロボトキンの思想を紹介したものだ。最後の二篇「クロボトキン」の經濟學、及び「教育論」は伊藤が書いたものだ。

◆「悪戯」大正十年三月出版。伊藤野枝との共著。社會運動家とし

ての苦闘の一記録である。(絶版)

◆「人間の正體」大正十年六月出版。明治四十年に出版された「萬物の同根一族」に、更に「精神篇」を加へたものだ。

◆「正義を求めし心」大正十年八月出版。「生の闘争、社會的個人主義」、「労働運動の哲學」の中の主要なものに、其後の諸論文を加へた、彼れの代表的論文集である。附録としてクロボトキンの「青年に訴ふ」(An appeal to the Young)が譯載してある。

◆「二人の革命家」大正十一年六月出版。伊藤野枝との共著。大杉はバクウニンの思想と行動とを、伊藤はエマ・ゴオルドマンの思想と生涯とを紹介したものだ。

◆「漫文漫畫」大正十一年十月出版。「惡戯の姉妹篇」である。翌月桂の宣傳的漫畫を添へてゐる。

◆「昆虫記」(第一卷)大正十一年十月出版。大正十一年十月出版。ラマンの「Souvenirs Entomologiques I, Etudes sur l'instinct et les Moeurs des Insectes」、「昆虫の本能と習慣に関する研究」の譯録だ。大正九年、豊多摩監獄に入獄中フアブルの著書に親み、出獄後「昆虫記」全十巻の翻譯に着手してゐたのであつた。

◆「無政府主義者の見たロシア革命」大正十一年十一月出版。ロシア革命に對する無政府主義者としての彼の態度を明らかにしたものだ。附録としてクロボトキンの「Les Temps Nouveaux」が譯載

してある。

◆「自然科學の話」大正十二年三月出版。安成四郎との共譯。フアブル著「Le Livre d'Histoires」の譯録。

◆「科學の不思議」大正十二年八月出版。フアブル著「Maitre Paul」の譯録。伊藤野枝との共譯。

以上の二譯書は「アルス科學知識叢書」の第一、及び第二篇で、科學の通俗講話である。

◆「日本脱出記」大正十二年十一月出版。一九二三年二月、ベルリンで開かれる筈であつた國際無政府主義者大會に出席せんとしてフランスに渡航した時の見聞記、感想、及び最近彼れが非常な興味を持つてゐたマフノ運動の研究等が收められてゐる。

◆「自叙傳」大正十二年十二月出版。先づ葉山事件の頃までを書く筈だつたんだが、遂に完成されず、本書にはただ彼れの幼少年時代と飛んで葉山事件しか書かれてゐない。その間を獄中記からの轉載によつて僅かに繋がれてゐる。

◆「自由の先驅」大正十三年三月出版。「正義を求めし心」の姉妹篇である。

編輯後記

◆僕等は此の追悼號を編輯するに當つて徒らに兩君を賞揚しようといふやうなナチな考へは持たなかつた。出来るだけ端的に兩君の思想性格に觸れようとした。従つて、或る點に於ては、讀者諸君の中から不滿抗議が出るやうな所があるかも知れない。しかしそれはやむを得ない事だ。もつと澤山の人に書いて貰ひたかつたんだが、紙面の都合もあつてこれだけに止めた。これも僕等にとつては大ぶの奮發なんだ。尙、本號に限り菊版にした。一つには寫真を入れる都合もあつたし、または保存の一つ上に都合よからうと思つたからだ。次號からの労働運動が以前通りの形に還るのは勿論だ。

◆序に三君の「遺骨事件」の其後の経過を報告して置く。十二月二十幾日に至つて、大化會の岩田が遺骨を警視廳に持つて出た事は既に諸君が新聞で御存じの通りである。で、それから三四日経つて、警視廳からとり來いとこの事であつた。社の村木が出かけた。村木が行つたのは、丁度十二月二十七日のおひ

る頃だ。虎の門某重大事件で警視廳は大變な騒ぎだ。骨を渡すどころぢやない。續いての政變と、またしても重大事件で大ぶこたつてゐるものと見へ、今だに通知がないから其のままになつてゐる。大杉達も、餘程の因果に生れたものが、骨になつてからも、いつまでも検事局や警視廳にまごついてゐる。

◆ちよつと口繪の説明をして置く。最初の大杉君の寫真は、フランスへ行くとときのパスポートにつけたものだ。大ぶ支那人臭くて、これなら偽せものとは思はれない位だ。野枝さんの寫真は五六年前に撮つたものだ。最近のいいのがなかつたから、やむを得ずこれにした。宗一君も五つの時に撮つたものだ。お父さんやお母さんと一緒にの寫真は、後ろに頭張つてゐる腕白小僧が大杉君だ。五番目の

は、フランスから歸つた當日、勞運社の二階で撮つたものだ。サイダアを飲んでゐるのはマコだ。大杉君の筆跡と題して載せたのは寫真がうまく出るかどうか分らないが、ホルシエキ革命は、革命はどんな風によつてはいけないかと云ふ事を吾々に教へて呉れた。書いてあるのだ。尙、大杉君の死體が衛成

病院で解剖に附せられてから軍隊の手で運び出されてゐる寫眞の隅に立つてゐるのは、左から大杉勇、代準介、大杉進の三名だ。また齋場正面の演壇に立つてゐるのは、當日の司會者岩佐君だ。其他の寫眞に就いては別に説明するまでもあるまい。

「労働運動」

三月から毎月一日十五日發行の半月刊にする

定價 一部 五錢 半年 六十錢 一年 一圓二十錢 (郵送料共)

本號に限り 定價四十錢 (送料二錢)

大正十三年三月一日納本發行 (毎月一回・一日發行)

東京市本郷區駒込片町十五
發行編輯 近藤憲二
兼印刷人

東京市本郷區駒込片町十五
發行所 労働運動社